

珍海の『菩提心集』について

舎奈田智宏

一、はじめに

興教大師覚鑑（一〇九五―一一四三）の教学上の特色の一つは、当時流行してきた浄土思想を真言密教の中に巧みに取り入れた点にある。日本の浄土教の流れは、源信（九四二―一〇一七）の登場以後比叡山を中心に大きく展開し、南都や高野山においても浄土思想が盛んになった。

今回私がテーマとしたのは、覚鑑と同じ平安時代後期の三論宗の僧、珍海（一〇九一―一一五二）が書いた『菩提心集』⁽¹⁾ についてである。

珍海は理法房と号し、越前已講とも称する。珍海は浄土往生思想に関する書を書いているが、そのなかでも特に『菩提心集』の成立が奥書にあるように大治三年（一一二八）に記した、という記述が正確なものであるならば、珍海三七歳の時書かれたものであり、またこの年覚鑑は三四歳で、珍海と覚鑑との間に交流があったことを示す記述が『靈瑞縁起』⁽²⁾ や『本朝高僧伝』⁽³⁾ にあることを加味すれば、覚鑑の成仏往生思想に関連する著作を書くにあたり、『菩提心集』に目を通し、何等かの思想的な影響を受けた部分や共通点があるの

ではないか、と推測できる。⁽³⁾

しかし、これまで私の力不足から詳しくそのことを検証することができなかった。そこで今回これまで行ってきた平安時代後期における成仏・往生思想に対する研究の一環として、この『菩提心集』にあらわれる往生思想と覚鑊の成仏・往生思想の関連について改めて考察を加えてみた。

一、『菩提心集』に説かれる往生思想について

珍海の生涯についてのまとまった記述は江戸時代に書かれた『本朝高僧伝』⁽⁴⁾にみられる。

『本朝高僧伝』によれば、珍海は絵師従五位上藤原基光の子で、出家の後東大寺東南院覚樹（二〇八四―一三九）の弟子となり、三論だけでなく華嚴・法相・因明を学び、「三会の講を経、師席に登る毎に、詞鋒俊利、あえて当たる者なし、時の人みな謂わく、文殊の応化なり」とあり文殊菩薩の応化であるといわれるほど深い学識の持ち主であったといわれる。後に東大寺の禪那院に移り住み『法華経』⁽⁵⁾、『維摩経』等を講じ、晩年には浄業を修し、『浄土義私記』、『決定往生集』を著したとある。また絵師としても有名で覚鑊に大日如来の像を贈ったとあり、覚鑊と親交があったことがわかる。さらに幾つかの書物の中で珍海の名前が見受けられ、覚鑊との関連も『靈瑞縁起』や『密厳上人行状記』⁽⁷⁾などでも述べられている。

珍海は、当時流行していた浄土往生思想に関連する著作を書いている。現在わかっている範囲で『菩提心集』『浄土義私記』『決定往生集』『安養知足相对抄』を書いたとされ、このうち『浄土義私記』はその名前が伝わっているだけで現存していない。現存する往生関連の著作とその成立年代は以下のようなになる、

・『菩提心集』

珍海の『菩提心集』について（舎奈田）

大治三年歳次戊申八月六日 沙門珍海書記⁽⁸⁾

・『決定往生集』

保延五年三月二十一日病中抄畢。 康治元年三月十二日。 重治定了 東大寺珍海云云⁽⁹⁾

・『安養知足相對抄』

久安二年三月九日抄畢 末学珍海⁽¹⁰⁾

これら現存する三つのうち、今回取り扱う『菩提心集』は、珍海の往生思想に関連する書物のなかで最も若い頃書かれたものであり、六十七の問答と最後に掲載された菩提心讃という和讃によって構成されている。問答の内容は、主に発菩提心と念仏行による往生を勧めることを中心としているが、浄土教学的なことだけではなく、一般仏教的なことについても述べられており、文章が漢字かな混じりで書かれていることから僧侶以外の一般民衆にむけて書かれたものであろう、といわれている。⁽¹¹⁾

さて『菩提心集』に説かれる往生思想についてだが、『菩提心集』という題名が示す通り、

凡この文のころは。よろづを勤めて菩提の心を発さしめむとなり。⁽¹²⁾（傍線筆者、以下同）

と、あるように人々に諸行を行うことにより、菩提心を起させることが『菩提心集』という書の目的であるとのべている。しかし珍海にとっては、菩提心をただ起させることが目的だったのではなく、それが往生のための要因として捉えられているところに特徴がある。往生に際し、菩提心が必要であるということは、

大師達のたまわく。かならず一時も心ひろき無上菩提の心を発して生ると。然れば菩提心を発さぬ人は生るべからず。⁽¹³⁾

と吉蔵の『観無量寿経義疏』を用い、さらに

問その初の心発し難し。かならず其心によらばいよいよ往生はかなひ難き事歟 答往生は苦しみを離る

る道。すみやかに菩提を取る事生を隔てず。久しく生死に止まりて多くのくるしみを受べきに。思ひもかけぬ悲願に逢ひて。五道生死を離れなんづるを。菩提心の人ごとにおもひ止まらるるいかなぞ。たとひ発しがたくとも励みてこそ発さんとおもふべけれ。⁽¹⁴⁾

問極楽はいかばかりの処なれば。かならず菩提心を発して生るるぞ。答彼の樂みは菩提の樂みに近

づけり、⁽¹⁵⁾ 仏浄土の樂を構えて菩提に進むる端とし給へり。爾れば必菩提心を本として往生すとはいふなり。

といい、これらの文から、菩提心を発することが往生するために必要であることがうかがえる。

これは後に珍海が書いた『決定往生集』のなかで、より明確に現れてくる、菩提心を往生の正因とした珍海の往生思想形態の一端を表しているといえる。ただこの菩提心についての詳しい説明は、『菩提心集』では述べられておらず、ただ菩提心を発することが肝要であると述べるに終始している。⁽¹⁶⁾

そして珍海は『菩提心集』において、念仏を往生するための行として挙げている。『菩提心集』の上巻において、

問この世の人は何なる行をしてか生死を速かにはなるべき。⁽¹⁷⁾

との問いに対し、

答大乘經の中に速かに生死を離るることおほく見えたり。しかも此世に於て最もいれたる要を取らば念仏の門に入るべし。⁽¹⁸⁾

法照恭み敬ひて文殊に問奉る。代の末の人は何なる行ひを專にすべきと。文殊の曰末世の衆生は唯念仏を專にすべし。謂く西方の阿彌陀を念じ奉れとのたまへり。⁽¹⁹⁾

と述べて、往生のためには数多くある大乘の仏法のなかでも、特に念仏行を重要とすべきであるということ

珍海の『菩提心集』について（舎奈田）

を述べている。

この念仏行について珍海は、『菩提心集』のなかで身業つまり礼拝、口業すなわち称名念仏、そして意業の観想念仏という三種類の念仏行があることをのべ、

問何かやうにか念仏をばすべき。答知べし念といは思ふ也おもひ意にあり。然も思ひをなすに由あるべし。廣くこれをいはん。或は身に礼拝なす。謂く西にむかいて遙かに拝み若は弥陀の形像にちかづきてぬかづく。或は口に御名を称へて功德利益を嘆め奉る。此身口の業も念仏にかぞふ。念より起るが故に。念を起したするが故に。念と同じく往生の業にそなはれば念仏といふ。然も心に色相光明を念じ。本願大悲を念じ。或は唯御名をおもひ。或ひはおほよすに随ひ仰ぐ。又菩薩声聞の大衆を称念し。宮殿宝池の莊嚴を讚歎する皆念仏の内也。又經を讀ても布施を行じても。功德善根は皆往生浄土の因縁と思へば浄土を念ずる也。浄土を念ずるは弥陀を念ずる也。況や仏に法身の功德あり。經法はすなわち是なり。仏に所作の利益あり。説法教化これなり。これを念仏といふ。皆往生の業因也。⁽²⁰⁾

また慧遠の

故に浄影大師の曰或は念じ或は礼し。或は讚め奉り或は其名を称する者悉く往生することを得と。⁽²¹⁾

という言葉を用いて、身口意の三業それぞれに念仏行があると述べている。

このうち礼拝行については、五体を地につける五体投地の礼拝を身業の念仏であるとしているが、問礼拝のありさま委しく承らん。答五体を地にいたす。謂く二の手二の膝及び頭これなり。ぬかとは額の名なり。額を地にあつればぬかずくといふ。数はいくつと定まらず。（中略）念仏の人はいかにも心を専らにすべし。又口に稽首といひ、頂礼といはんも口業なれ共亦礼拝に入りぬ。又心に礼拝と思へば礼拝をそなふ。また数珠をめぐらし。舌の端を動かすも身業の礼拝におさむべし。⁽²²⁾

とその後で述べていることをみると、五体投地の礼拝だけでなく口業や意業の念仏も身業の念仏となると珍海は見ているものと思われる。

称名念仏は、

問 口業の称讃また細しくうけたまはらん 答 南無大悲阿弥陀仏とも南無阿弥陀仏とも大悲阿弥陀仏とも阿弥陀仏ともまうす。これを称名といふ⁽²³⁾

南無大悲阿弥陀仏・南無阿弥陀仏・大悲阿弥陀仏などに加え、無量寿経にある阿弥陀仏の十二号をあげ、いずれの名をとなえることも口業の称名念仏と珍海は捉えている。またこれを唱える回数については、二三例を挙げてその方法等を記してはいるものの、

数はとりて知るもよし。取らずともあるべし⁽²⁴⁾

と述べている箇所があることから、特に回数についての強制はしていないようである。

意業の観想念仏は、身口意の三つの念仏行のなかでも、

答 知べし念といは思ふ也おもひ意にあり。然も思ひをなすに由あるべし。廣くこれをいはん。⁽²⁵⁾

問 意業の中には何にか観じ奉るべきや 答 口に嘆めつる事の心を思ふべし。然も此観念をまさしき念仏といふ⁽²⁶⁾

とのべ、珍海が『菩提心集』では観想念仏を最も重要視していることがわかる。具体的には阿弥陀仏の名を念ずることと、阿弥陀仏が来迎することの二つの観想念仏を挙げている。この観想念仏については、阿弥陀仏の姿を観想する方法、仏の眉間にある白毫を観ずることや心眼の開き方等、他の二つに比べて非常に詳しく説明がされていることから珍海が観想念仏を重要視していることがわかってくる。

ただし、珍海は、これら身口意の三業における行だけを念仏行と捉えるのではなく、

珍海の『菩提心集』について（舎奈田）

問此世の人は念仏ばかりにて経を読み布施を行はずや答念仏をもはらにせよといは。念仏をむねとして異行をはこれによせよとなり。帝の幸といふに百官みな従ふが如し。念仏を君として経をよみても念仏を進め助け。布施持戒をも念仏の道に入れよと也⁽²⁷⁾

とのべて布施をすることや戒律を守ることとも念仏行に含まれるとの見解を示し、そのほかの箇所でも、

又薬師如来を念ぜよ。経に極楽を願ふともいまだ定まらざらん。薬師の御名を聞かば八人の菩薩をつかはして道を示さんといひ。⁽²⁸⁾これ仏の深き境界なり。思議すべからずといへり。又方等陀羅尼経を書け。又恵心僧都は丈六の仏を造るをぞ。⁽³⁰⁾決定往生の業とはのたまひける。⁽³¹⁾

薬師如来を念ずること、方等陀羅尼経を書くことや恵心僧都源信が丈六の仏を造ったことを挙げ、これらも往生のための定業であるとしている。『菩提心集』下巻の、

問浄土に生れんにはよろづの行ひを兼ねべきか 答本は爾るべけれ共。浅き人は唯一つをよくねんごろにしてもありなん。それぞよかるべき。野にかかり山にかかる。由なかるべし。さりとして偏に唯一つをのみせよとはあらず。よくこころ得べし。⁽³²⁾

というこの一文を見ると、観想念仏を念仏行の中心としながらも諸行往生を認めるといふ珍海の姿勢が現れている。

三、覚鑠の成仏・往生思想との関連について

以上のような『菩提心集』における往生思想を踏まえ、次に覚鑠の成仏・往生思想において特徴的なものを抽出し、そのキーワードに沿って『菩提心集』をみていった。覚鑠の成仏・往生思想⁽³³⁾の特徴を表す言葉と

しては一密成仏・機根論・現身往生と順次往生・一門普門の曼荼羅觀・信心、特に深信の重視・末法思想の否定といったことが挙げられる。

しかし事前にある程度予測はついていたことではあるが、『菩提心集』には、一門普門の曼荼羅觀に基づく思想や、この娑婆世界をそのまま極楽浄土と考える、といったような密教的内容は書かれておらず。また珍海が三論の僧であるということと関係があるのか、本文中に文殊菩薩の名が度々出てくるなど、『菩提心集』とは顕教的な浄土思想の立場から述べられた書であるといえる。

しかし『菩提心集』を読み進めていくなかで、興味を惹かれる箇所があった。それは、『般若経』を引用した、

問浄土の果報は。いと妙なるものを。只一つの事にては。いかが到るべき。遠き道を行かん。旅路の物の具をそなへざらんがごとし 答般若経に云。⁽³⁴⁾一つの行ひを淨くすれば。すなはちよろづの事をそなふ。かくのごときの行ひは。一なれども。浄土に生るといへり⁽³⁵⁾

という箇所である。

なぜこの箇所に私が興味を惹かれたのかといえば、覺鑊の成仏往生思想の特色として一密、二密による成仏を挙げることができるが、これは本来三密行による成仏が真言宗の本来の姿勢であるにもかかわらず、たとえ一密二密の行であっても行者の信心によって、大日如来の加持力により残りの一密二密が表れ、三密が相応して成仏するというものである。この覺鑊の一密二密のみの行であっても、残りの行が大日如来の加持力により備えられる、というものと同じようなパターンをもった考え方であるように思われたからである。

『五輪九字明秘密釈』には、一密成仏を説明して

第三行雖無如上二種智觀唯深信解応結印誦明自然頓成佛故 第四行設無余二行及廣智唯觀一義解一法至

珍海の『菩提心集』について（舎奈田）

心修行故即身成仏故設亦無一法智慧及余二行唯以信為門觀一字形成佛觀一印形三摩耶形成仏觀一尊形相之一相而成仏及無余行唯誦一明一字成仏並結偉印契亦無余密行唯相応必定即身成仏故総云爾也。

問正成仏一刹那之時為三密相応成仏為当云何 答正成仏之時必定三密相応即身成仏也。

問曰若言三密相応即身成仏為当云何 答彼依二行一行等成仏者是非正成仏之時亦由修余二行不思議加持力故忽出生余二密等三密具足即身成仏也。

問何等經論分別說即身成仏義耶 答如即身義說。⁽³⁶⁾

と書かれている。ここに「余の二行を修する不思議の加持力によるがゆえにたちまちに余の二密等を出生して、三密具足して即身成仏するなり。」という一文があるが、ここに、ひとつの行をおこなえば、その他の行も備わるといふ考え方がのべられている。この一行を行うことによりその他の行の功德を備えるという考え方を、覚鑠が、珍海の『菩提心集』の「一つの行いをきよくすれば。すなわちよろずの事をそなう。かくのごときの行いは、ひとつなれども、浄土に生きるといへり」というこの一文からなにかしらヒントを得たのではないかと考えられる。

つまりこの『般若経』を用いた『菩提心集』の一文を、覚鑠が密教的に解釈するとき、そこに大日如来の加持力という密教的要素が加わるのであり、正成仏の際には、例え一密のみの行であっても大日如来の加持力により三密が相応する、という『五輪九字』に書かれた一密成仏思想の形成に何かしらの影響があったのではないかと考えられるのである。

また最初に少し触れたが、珍海と覚鑠に交流があったのではないかと考えられる記述が、『本朝高僧伝』『靈瑞縁起』『真俗雜記問答抄』⁽³⁷⁾にある。またこれまでの先行研究⁽³⁸⁾でも指摘されているように、覚鑠と珍海が法脈の上において非常に近い関係にあり、同じ師から教えを受けている。このような点に加え、『五輪九字』

が末尾の文から寶生房教尋の死後、すなわち永治元年覺鑊四七歳以降に書かれたことが推測されるのに対し、⁽³⁹⁾『菩提心集』が、奥書から大治三年、覺鑊三四歳の時に書かれたものであり、『五輪九字』が成立する少なくとも十年以上も前に書かれたのではないかと考えられることから、覺鑊が『五輪九字』等を書く以前に、『菩提心集』に目を通していたことが十分推測されるという状況も含めて加味すれば、『菩提心集』から覺鑊が影響を受けた部分があるのではないかとということが考えられる。

四、まとめ

以上のようなことから、今回珍海の『菩提心集』を読んでいくなかで、『菩提心集』が覺鑊の成仏往生思想、特に一密成仏思想の形成に多少なりとも影響を与えた、あくまで一つの要因としてはあるが、そのようなことがあるのではないか、ということが推測できる。ただ『菩提心集』のみが影響与えたはずはなく、これ以外にも当然覺鑊の成仏往生思想に影響を与えたものがあると思われるので、今後『菩提心集』以外の書の研究にも取り組みたいと考えている。また今回『菩提心集』を覺鑊との関連を中心に取り組んだが、不十分な点もあり、また覺鑊との関連というテーマ以外にも興味を惹かれる部分があり、まだ研究する余地がある分野であろうと思われるので、引き続き研究を進めたいと考えている。

註

- (1) 興教大師伝記史料全集二八・二九頁
- (2) 大日本仏教全書 本朝高僧伝一 一九九頁

珍海の『菩提心集』について（舎奈田）

(3) 覚鑑と珍海との間に影響があるのではないか、ということに関しては、橘信雄先生が「南都の浄土思想Ⅱ」（豊山教学大会紀要十九号 平成三年）において珍海の往生思想を特に『決定往生集』を中心に考察し、覚鑑との思想的な関連についても述べられている。

(4) 大日本仏教全書 本朝高僧伝 一一九九頁

(5) 現存する絵は「玄證古写本粉本の帝釈天図」（承安二年十二月）「高山寺伝古写本の吉祥天図」（建承二年二月）「仁王経儀軌息災曼荼羅」（天承元年二月）がある。

(6) 珍海の名前が出てくる主な史料としては、『尊卑分脈』（国史大系五九第二篇二八三頁）『三会定一記』（大日本仏教全書四九卷威儀部一、二一五頁b段、二二七頁a段）『八識義章研習抄』（大正蔵七十卷六六五頁b段）『宇槐記抄』（増補史料大成二五卷台記三、二〇八頁下段）『本朝世記』（新訂増補国史大系九、五〇四頁、八四一頁）『右中記』（史料大成十二、右中記五、一八五頁下段）『四箇大寺古今伝記拾要新書』（大日本仏教全書八四卷二二九頁）『覚禅抄』（第日本仏教全書五四卷四頁）などがある。また『浄土法門源流章』（浄土宗全書十五卷 五九〇頁）にも「東大寺三論珍海已講兼研浄教選決定往生集一卷浄影義章作浄土義私記二卷」と珍海に関連する記述がある。

(7) 興教大師伝記史料全集 一四〇～一四二頁

(8) 浄土宗全書十五卷五一六頁

(9) 『大正蔵』八十四卷一一六頁a段

(10) 『大正蔵』八十四卷一一八頁a段

(11) 「珍海の往生思想」坂上雅翁 浄土宗研究十 昭和五十七年

(12) 浄土宗全書十五卷五三一頁

(13) 浄土宗全書十五卷五一六頁

(14) 浄土宗全書十五卷五一六―五一七頁

(15) 浄土宗全書十五卷五一七頁

(16) 『菩提心集』では菩提心とはいかなるものなのか、明確に書かれてはいない。ただ菩提心を発することの必要性・重要性を述べるに終始している。『菩提心集』において菩提心、菩提の心、といった言葉は、約三〇回使われている。また全てに満遍なく使われているのではなく、九品往生について説明する箇所。(三回) 上巻最後の部分で、往生する為には菩提心を発することが必要であると説く箇所。(十五回) 下巻で戒律について説明する流れにおいて三聚浄戒を説く箇所。(三回) 人だけでなく鳥や獣にも菩提心を発することを勧める箇所。(二回) 菩提心と道心は同じ意味である、と説く箇所。(五回) で集所的に使われている。また何箇所においても珍海自身文ではなく、引用や要約した文の中に菩提心という言葉が使われている。(私が調べ限りでは九箇所見つかった。もともと珍海が意図的に使った部分、そうでない部分はあるだろうが) 加えて、この書が漢字かな混じりで書かれた一般民衆向けの作品ではないか、ということも含め今後珍海が『菩提心集』において菩提心をどのように捉えていたのか、考察する必要性がある。

補足するならば、後に珍海が書いた『決定往生集』についての先行研究を調べたところ、

「珍海の菩提心に対する解釈は、『決定往生集』になると一層はつきりしてくる。すなわち『決定往生集』に十門を開くうち、第五修因決定においてさらにこれを六門に分け、その第二に「別して菩提心を明すとは」として、「問う、ただ浄土に生ぜんことを求めばすなわち往生することを得とや為せん。かならず菩提心を発すべしとなさんや。答えて云わく。必ず菩提心を発しまさに極楽に生ずべし。」と述べ、続いて吉蔵・慧遠・曇鸞・道綽・迦才の諸師も同じく、菩提心を往生の業主としているが、これに続いて珍海は菩提心について、浄影寺慧遠の『大乘義章』巻第九に「発菩提心の義に三門分別あり」として、菩提心について、相発心(二) 息相発心(三) 證発心の三種の別があることを明かすのを引いて息相発心と證発心につ

珍海の『菩提心集』について（舎奈田）

いては難行であると述べたのち、相発心について「発心浅深無量なり。しかるにこの中においてしばらく最初の一念発心を明かす。謂く十信の前の常没位の中に善智識に遇ひ、大乘を聞くことを得。一念の心を発し、随順愛樂す。たまたまこの心を起すを発道心と名づく。すなわち名づけて隣近善趣の人なり。（発菩提心とは義章中十信前に相発心を明かすこれなり）すなわちこの世の人、世の非常を厭い浄土を欣求する、これ発心なり。」として、相発心を十信前を常没の凡夫が発す菩提心であり、世の非常を厭い、浄土を欣求する願生心、いわゆる厭欣の願生心を菩提心にとらえ、これが往生の業主となることを示している。」（坂上雅翁「珍海の往生思想」浄土宗学研究十）

というのがこれまでの先行研究にある『決定往生集』に説かれた菩提心の基本的理解である。ただしこの理解がそのまま『菩提心集』に当てはめることができるのか、今回は十分に調べることはできなかった。

- (17) 浄土宗全書十五卷五〇四頁
- (18) 浄土宗全書十五卷五〇四頁
- (19) 浄土宗全書十五卷五〇四頁
- (20) 浄土宗全書十五卷五〇四、五〇五頁
- (21) 浄土宗全書十五卷五〇五頁
- (22) 浄土宗全書十五卷五〇五頁
- (23) 浄土宗全書十五卷五〇五頁
- (24) 浄土宗全書十五卷五〇六頁
- (25) 浄土宗全書十五卷五〇五頁
- (26) 浄土宗全書十五卷五〇七頁
- (27) 浄土宗全書十五卷五〇四頁

(28) 『薬師如来本願経』(大正蔵十四卷四〇二頁c段)「若欲往生西方極樂世界阿弥陀如来所者。由得聞彼世尊薬師瑠璃光如来名号故。於命終時有八菩薩。乗空而來示其道徑。即於彼界種種異色波頭摩華中自然化生。若復此人欲生天上即得往生。」の部分指着しているものと思われる。また『薬師瑠璃光如来本願功德経』(大正蔵十四卷四〇六頁b段)にも同趣旨の文がある。

(29) 『夾註菩提心集』によれば天台の四種三昧の所依の經典である北涼法衆訳『大方等陀羅尼経』との見解が示されていた。

(30) この丈六の仏について、源信の生涯を調べた結果興味深い逸話を発見した。奈良県生駒郡斑鳩町に吉田寺という寺がある。この寺は現在「ぼっくり往生の寺」と呼ばれ人々の信仰を集めている。この寺の開山には幾つか説があり、そのうちの一つに源信が永延元年(九八七)に開山したという説がある。またこの「ぼっくり往生」の由来は、源信が母親の臨終の際、魔除けの祈禱をした衣を着せたところ何の苦しみも無く称名念仏の中に往生をとげた、という話からきている。この寺の本尊の阿弥陀如来像は、高さが一丈六尺(約五メートル)あり源信が境内の栗の大木から一刀三札の念仏のなかで造ったという。つまりこの現在伝わっている逸話が、珍海存命の頃よりすでにあり、そのことを珍海が、『菩提心集』に書いたのではないだろうか。ただしこの逸話が珍海の存命の頃よりすでにあった、という確証は現段階では得られておらず、また『夾註菩提心集』にも、吉田寺の一丈六尺の仏であるとは書かれていない。今後源信の生涯も含めて機会があれば研究してみたい。

(31) 浄土宗全書十五卷五一五頁

(32) 浄土宗全書十五卷五二九頁

(33) 今回は、覚鑊の成仏・往生思想を調べるにあたり、『五輪九字明秘密釈』『二期大要秘密集』『阿彌陀秘釈』『密嚴浄土略観』を中心に使用した。

(34) どの『般若経』を指しているのか、珍海は書いていないが、私が調べた限りでは『勝天王般若波羅蜜経』(大

珍海の『菩提心集』について（舎奈田）

正蔵八卷七〇三頁c段）の第三卷「若有菩薩摩訶薩於前所說種種法中。淨修一行即修衆法。如是一行得生淨土。何以故。一一行中具衆行故」（大正蔵八卷七〇三頁c段）の一文が最もその趣旨に近いと思う。『夾註菩提心集』にも、『勝天王般若經』の同じ部分が該当すると述べられていた。

(35) 浄土宗全書十五卷五二九頁

(36) 『五輪九字明秘密釈』興教大師全集一一七三・一二七四頁

(37) 真言宗全書三七卷二九二頁上段

(38) 櫛田良洪著『覺鑒の研究』・橘信雄「南都の浄土思想Ⅱ」（豊山教学大会紀要十九号平成三年）等

(39) 興教大師全集一一八〇頁

【キーワード】珍海、菩提心集、往生思想、覺鑒、一密成仏